

2

大分県から絵の具をつくる

画材屋や文房具屋がない時代、絵の具がなくなったらどうしていた？動物の血は赤く、最も身近な色材になるかも知れない。しかし時間が経つと黒く変色するし、血で書いた文字や絵は嫌悪感がある。血が絵の具として用いられたのは、特別な儀式においてだろう。植物、花びらや葉っぱも時間が経つと変色してしまうが、染料として用いられれば媒染剤の種類によってさまざまな色を得ることができ、体質顔料をつくることもできる。しかし何となく土や石、鉱物を砕いて顔料とするのが、絵の具として一番とられていた方法だ。大分県は広い。地域ならではのものを使って絵の具がでないか。実験と試行錯誤を繰り返し、レクチャーやワークショップにも展開している。



【ザ・ピグメント ○○色をつくる】



ピグメントとは絵の具のもと、顔料のことだ。県内各地の石ころから顔料をつくっている。津久見色、別府色、姫島色など、行く先々の名前を付けた、その地域特有の色をつくらうという試みである。講座では参加者が石を金槌で叩き、茶漉しでふるいにかける。乳鉢ですりつぶし、#300の紗幕を通過させると、パウダー状の顔料ができた。石を砕いたとは思えない、柔らかなパステル色の顔料に、「おー!!」と歓声が上がった。さらにフライパンで焼くと、色が変わるものもある。

もちろん絵の具をつくること自体面白いが、ただ面白がるだけでなく、地域の石や土から絵の具ができることを通して、モノの見方や価値感が変わればと思っている。それは世界が広がることでもある。最終的には大分県18市町村の石や土から1万色の顔料を制作し、教材ボックスに収めることを目指している。

【関サバ・ボーン・ブラックの秘密】



ボーン・ブラック、ピーチ・ブラック、バイン・ブラック、アイボリー・ブラックは、今では色名しか残っていない黒い絵の具だ。古くはそれぞれ牛の骨、桃のタネの核、ブドウの蔓、象牙を蒸し焼きにして炭にしていたらしい。その材料が色名の一部として残っている。では大分県ならではの黒い絵の具をつくるとしたら、何が考えられるだろう。関アジ、関サバ、姫島車エビ。どれも大分県の名産品だ。笑い話にしか聞こえないとの心配もよそに、まじめに取り組んだ。

初めにつくってみたのが関サバ、関アジのボーン・ブラック。美術館近くの居酒屋に行き、骨をもらえないかと相談したら、「絵の具なんてできるの？」と女将に不思議そうな顔をされた。姫島の車エビは、島の小・中学校へアウトリーチに行くたび、昼食に焼車エビ定食を頼み、殻はおいしいのに食べずに我慢して持ち帰った。骨も殻も空き缶に入れて蒸し焼きにすると炭になる。植物系、例えば木の枝や松ぼっくりは燻製のようなにおいがすることが多く、好き嫌いがわかれる。牛の骨など動物系はとも嫌なにおいだ。リンが燃えるからか、火葬場のにおいに近い。しかし関アジ、関サバ、そして車エビは香ばしいにおいになった。こうしてつくった大分ならではの黒い顔料に驚く参加者たち。「そんなことができるんだ!」と笑い声が上がった。

【展色材】

朝寝坊して卵かけ御飯を急いで食べている時に、洋服にこぼしてしまう。濁くとガビガビになり、洗ってもなかなか落ちない。そんな経験はないだろうか。そういう性質を持つ卵を展色材として使ったのがテンペラ画だ。展色材は顔料の粉をキャンバスや紙面などの支持体につける糊のような接着剤のような役割を果たす。展色材の種類により、同じ顔料でも発色は異なり、絵画ジャンルも変わる。水彩画の展色材はアラビアゴム。動物の骨や皮を煮出して抽出する膠は、日本画で使われる。煤と混ぜると墨になる。乾く性質の油を使ったのが油絵の具だが、混ぜるのではなく、よく練ることが肝心だ。

展色材は、一般的には展色剤という字を使うことが多いが、ここでは色の材料という意味を強調させたいので、材の字を使っている。今は県内の石や土から顔料をつくっているが、ヒマワリのタネから油、関アジ・関サバ、そしてイノシシから膠など、ゆくゆくは展色材も大分県産のものでつくりたい。こうした専門的な話とともに、実際の展色材と顔料を混ぜるといふ初めての体験に興味津々の参加者たちだった。



【幻のイタボガキ胡粉】

胡粉はもともと鉛からつくられる白い絵の具を指していたが、室町時代のころより貝殻からつくられるものを指すようになった。中でもイタボガキやハマグリ、ホタテは白色度が強く、天日・風雨にさらして風化させ、胡粉をつくった。山口県周防灘の海岸でイタボガキを拾ったことがあり、大分県でも周防灘に面している中津〜豊後高田の海岸に流れ着いているかも知れないと、探してみた。しかしまったく採れない。探し続けると、なんと豊後高田の岩本水産で養殖してインターネット販売していた。すぐに訪ねて行く。すると豊前海には海底の石に付着した天然イタボガキが生息しており、養殖も始めているとのことだ。講座ではこのイタボガキをみんなで砕いてみたところ、キメの細かい真っ白な粉になった。これでまた1つ、大分のモノで教材ボックスは充実することとなった。



【松竹梅ピスタ】

ピスタというインクの名前を聞いたことがあるだろうか。今ではほとんど聞かないが、14世紀から19世紀に使われていた、植物タールからつくるインクである。『世界素描体系』(講談社)によると、多くの作家がピスタを使っていたらしい。そこで大分県産の松ピスタと竹ピスタをつくってみた。松や竹を空き缶に入れ、蒸し焼きにして炭を作る際に、缶に付着した植物タールを丁寧に筆と水で溶かす。その上澄み液をとるとピスタができた。もう少し簡単に抽出する方法を博物学者の森田恒之氏に教わる。試験管に松の木を削ったチップを入れ、直接ガスコンロであぶるのだ。みるみる炭化し、茶色い液体が少しずつ流れ出て底に溜まった。この実験は美術館で行うわけにはいかないので、講座では映像で紹介した。

次は梅の木からピスタを抽出したい。すでにいつも参加されている方から豊後梅の枝をもらっている。松竹梅3種のピスタは果たして描き心地や発色は異なるのだろうか。解明の日も近い。



3 美術からみた文化



身の回りにあるさまざまな事象・現象を美術的視点でとらえたり、絵画、彫刻や建築、さらには洞窟絵画から現代美術までの美術作品に美術史や図像学を交え、美術を視る楽しさを知るための体験型レクチャー。映像や画像、そして作品から「見る」「観る」「視る」について考える『視点と視線』、水の特性をふまえた美術作品を紹介し水の存在を考える『水のゆくえ』、植物そのものの形から生命力までを表現した作品を紹介しつつ展示作品を視る『植物ってすげえ!』などを行っている。

4 素材と技術



美術作品を制作するためには素材と技術が必要不可欠。その2つの関係に、実際に素材や道具を触りながら迫る体験型レクチャー。素材としての竹が工芸のヒゴに変わることや、その道具についての話『竹・素材の変容』、繊維を紡いで糸にする最も原始的な紡ぎ車スピンドルを使った『紡ぐ』などを行っている。